

## 戦争中の陸軍の軍用機

川島 順 予科21-7  
(越谷市) 航空7-1

平成22年4月3日に開催された朝霞駐屯地創立50周年記念式典に合わせ振武台記念館内に陸軍予科士官学校のジオラマと大東亜戦争に活躍した陸軍の軍用機の模型13機が新に展示された。

予士校のジオラマは高橋昭典君の提案で、今まである予士校の模型は余りにも貧弱なので、もっとしっかりしたものを作成し振武台記念館に寄付しようと昨年60期の常幹に提案し、実現したものである。

それに付随して陸軍の戦闘機の模型を寄付してはという案が浮上した。これは元々小生が修武台記念館に陸軍の戦闘機の模型を寄付しようと提案したもので、修武台記念館には、加藤はやぶさ戦闘隊長の遺品に付随して一式戦の模型が陳列されているが、その他の航空機は桜花と零戦の実物が展示され、模型も海軍機が主力をなしていた（後に陸軍軍用機の模型も補充されたと聞く）。振武台記念館でも現在展示されている航空機の模型は零戦、川西大艇等が主力で陸軍の飛行機は隼、鍾馗、二式複戦のみである。そこで、大東亜戦争で活躍した陸軍の戦闘機、一式戦（隼）、二式戦（鍾馗）、三式戦（飛燕）、四式戦（疾風）の模型をそろえて寄付したいと思い立った次第である。

その動機は、平成17年8月の毎日新聞に「模型に込めた平和の思い」という記事を目にした。川口で自動車部品を製造している「マルシン工業」社長の川島博さんの

2歳年上の次兄の勇さんがレイテ沖の空戦で戦死、長兄の一さんも本州東北沖で戦死している。95年茨城県で開かれた模型飛行機の航空ショーの話聞いた川島社長は遠い空に散った2人の兄を思い浮かべ、模型飛行機の製作を手がけることとなった。早速、同社に問い合わせしてみると、一式戦、三式戦、四式戦の模型はあるが二式戦はないという。模型は全て1/48の金属製モデルで実機を精巧に再現している。

なぜ二式戦を作らないのですかという問いに対して、二式戦は人気がないからだとの返事。早速、二式戦の鍾馗について調べてみると、鍾馗は中島飛行機がキ-44として開発した重戦（設計主任は戦後ペンシルロケットで有名になった糸川英夫博士）で、旋回性能よりも速度を優先させており、優れた上昇力、加速力、急降下性能を備えた優秀な迎撃機であったが、半面、日本の戦闘機としては旋回性能、航続力は短く、操縦の容易な従来の軽戦での格闘戦に慣れた日本のベテランパイロットには、離着陸の難しさなどを理由に嫌われる傾向にあった。また、当初は22ミリ機関砲を搭載する予定であったが生産が間に合わず12.7ミリ機関砲しか搭載できず、重戦としての威力も今ひとつであった。しかし、開戦当初はバップアローやハリケーンに対して可成りの成果を上げたが、その後の本土防衛戦で高々度で飛来するB29に対しては過給機が実用化されなかったためにあまり活躍できなかった。

次に登場したのが三式戦である。三式戦のエンジンはドイツのメッサーシュミット等を使用されていたエンジンをライセンス生産した水冷式エンジンを搭載した。水冷式エンジンのため流線型の機体はスマートでいかにも性能の良さを連想させたが、日本の加工技術水準の低さからエンジンの不調が多発し、余り活躍しないうちに生産が

中止された。しかし、三式戦の余った機体に空冷エンジンを搭載したのが五式戦として終戦末期に登場した。

その後、陸軍は四式戦の開発に主力を注ぎ、二式戦の生産を打ち切ったが、二式戦についてB29攻撃用に特化した性能・装備の改良を行なっていれば、可成りの成果を挙げることができたであろうと外国の専門家は云っている。

小生が鍾馗と出会ったのは、中学の低学年の時である。私は立川の府立貳中に在学していた。貳中は立川飛行場に隣接していた。当時、立川飛行場は陸軍の新規開発機のテスト飛行に使用されていたので、珍しい飛行機を沢山見ることができた。鍾馗は可成り早い時点で学校の校庭の上空を飛行していた。あのずんぐりした胴体の特徴からすぐ分かった。鍾馗は下から写真を撮ってはいけないとの噂が流れていた。多分フラップに特別の仕掛けがしてあったのではないか。そういわれると無性に写真を撮りたくなり、何枚か写真を撮影した記憶がある。

それとは別に、開戦当時からもの凄く速い飛行機が飛んでいた。双発でスマートな機体は魅力的であった。後で分かったことであるがこれが新司偵であった。

B17も飛んでいた。これは満州で捕獲したもので、学校の校舎の屋根すれすれにものすごい音を出しながら4発の大きな機体が頭の上を飛んでゆく。まさに圧巻であった。当時は騒音などあまり気にならなかった。むしろ胸がわくわくする興奮に駆られた。

話は初めに戻るが、陸軍軍用機の模型の寄付は、高橋君のアドバイスもあって、戦闘機だけでなく、爆撃機、偵察機、練習機を含めて、主要機種を全部揃えようということになり、結果的には、97式戦闘機、1式戦（隼）、2式戦（鍾馗）、3式戦（飛

燕）、4式戦（疾風）、5式戦、2式複座戦闘機（屠龍）、99式軽爆、97式重爆、100式重爆（呑龍）、4式重爆（飛龍）、100式司令部偵察機（新司偵）、95式練習機（赤とんぼ）の13機、但し、2式戦、2式複戦は振武台記念館に前から展示されていたものを使用した。